

発達障害者支援特別委員会

目 次

平成18年度発達障害者支援特別委員会報告書

- I. は じ め に
- II. 活 動 内 容
- III. ま と め
資 料

発達障害者支援特別委員会

(平成 18 年度)

平成18年度発達障害者支援特別委員会報告書

広島県地域保健対策協議会発達障害者支援特別委員会

委員長 大澤多美子

目 次

I. はじめに

II. 活動内容

1. 発達障害専門医師養成研修会の実施

A. 平成18年9月30日(土)～10月1日(日)

B. 平成18年12月2日(土)～12月3日(日)

2. 医療サポート手帳の作成

III. まとめ

IV. 資 料

発達障害専門医師養成研修会チラシ(資料1)

受診サポート手帳(表紙のみ:資料2)

～医療機関の皆様へ～

「医療サポート手帳」にご協力くださいの

チラシ(資料3)

I. はじめに

この委員会は、平成17年度に新規に発足、今年度が継続2年目で最終年である。平成17年度は、県医師会員にアンケートを行い、専門診療を行っている医師などの名簿を作成し、市町村や相談機関等へ配布した。また、発達障害児を早期に発見するための医師向けのリーフレットを作成し、それをもとに医療・保健・福祉・教育関係者に対する研修会を開催した。発達障害に係わる専門的医療機関の確保に役立つとともに、関係者が障害の特性を配慮し、必要な援助を更に充実することが期待された。平成17年度に予定した事業は100%実施したが啓発活動が中心であり、この委員会の目的である「専門的医療機関の確保」についての達成率は極めて低いままであった。そのため今年度は①医師を中心とした研修会の実施などを通して全体のレベルアップと専門性の確保を図る、②医療機関と本人・保護者とのネットワークの構築のため、受診サポート手帳の作成・配

布などを行う、ことを目的として、2年目の活動に入った。

II. 活 動 内 容

土曜と日曜日の2日間の研修会を2回、計4日間の研修を行った。土曜日は、発達障害児者に関わる専門職、日曜日は医師のみを対象の研修会を行った(資料1)。

1. 発達障害専門医師養成研修会の実施

A. 平成18年9月30日(土)～10月1日(日)

(1) 平成18年9月30日(土) 10:00～12:30

対象:発達障害児者に関わっている専門職(医師に限らない)

講演テーマ:「広汎性発達障害の早期発見と早期診断について」

講師:国立精神・神経センター精神保健研究所
神尾陽子先生

(講師略歴)

1983年3月 京都大学医学部卒業

1983年6月～1984年3月 京都大学医学部精神神経科研修医

1984年4月～1985年3月 大阪赤十字病院精神神経科研修医

1985年5月～1985年12月 京都大学医学部精神神経科医員

1986年1月～1991年9月 京都市児童福祉センター診療所精神科

1991年10月 渡英

1992年1月～1991年9月 ロンドン大学付属精神医学研究所(Institute of Psychiatry)
児童青年精神医学課程(diploma course)終了

1992年2月～2001年3月 京都大学医学部精神神

経科助手

2000年7月～2001年4月 フルブライト研究員として米国コネチカット大学訪問研究員

2001年4月～2006年6月 九州大学大学院人間環境学研究院 助教授

2006年7月～現在 国立精神・神経センター精神保健研究所 児童・思春期精神保健部 部長

- ・日本児童青年精神医学会 学会認定医（平成10年9月25日）、日本児童青年精神医学会 学会認定委員、日本自閉症スペクトラム学会 評議委員、日本自閉症協会 研究部会員

（講演抄録）自閉症及びその他の広汎性発達障害（Pervasive Developmental Disorders: PDD）の人々は、生涯に渡って相互的な対人関係、言語やコミュニケーション、共感性、想像力、柔軟性などの障害のために、家庭生活や学校、地域、職業などの社会生活に深刻な困難を抱える。最新の疫学研究ではPDDは100人に1人の割合で存在し、多くは、知的障害を伴わない高機能自閉症、アスペルガー障害、特定不能の広汎性発達障害（Pervasive Developmental Disorders Not Otherwise Specified: PDD-NOS）軽度発達障害であることも分かっている。つまり従来考えられてきた幼児期の言語や認知発達は一般的な社会的予後を予測するとは限らないことになる。また欧米の報告から早期介入がその後の社会的発達に効果的であることが示されている。これらより、わが国においても、IQ 発達水準にかかわらず自閉症やその他のPDDの子どもたちに早期発見と早期療育の道を拓くことは緊急の課題であると言える。講義では、幼児期自閉症チェックリスト（Checklist for Autism in Toddlers: CHAT）や修正版幼児自閉症チェックリスト（Modified-CHAT）などの、今日欧米で広く用いられているPDD早期発見ツールを紹介し、さらにわが国で行われている地域ベースの早期発見の最新の動向について述べる。早期発見ツールが同定するのはどのような子どもなのか、そしてわが国で発見された児と家族にどのような支援が可能であるか、について私たちの知見から報告する。

(2) 平成18年9月30日(土) 13:30～16:00

対象：発達障害児者に関わっている専門職（医師に限らない）

講演テーマ：高機能広汎性発達障害の医学的理解

講師：京都大学医学部保健学科 教授 十一元三先生

（講師略歴）

平成元年 京都大学医学部卒業

平成6～10年 京都大学大学院医学研究科（脳統御医科学系、臨床精神生理学専攻）

平成11年 医学博士（京都大学）大津家庭裁判所 医務室技官（兼任）

平成11～15年 滋賀大学助教授（保健管理センター）

平成12～15年 文部科学省在外研修制度により渡米、ケース＝ウェスタンリザーブ大学医学部 児童青年精神医学部門主任研究員

平成16年 京都大学教授（医学部保健学科）

現在 京都大学教授（医学部保健学科）

ケース＝ウェスタンリザーブ大学医学部客員講師（兼任）

滋賀県こころの教育相談センター 顧問専門医（兼任）

京都警察病院健康管理委員（精神科）

- ・学術関連役職 日本児童青年精神医学雑誌 編集委員、近畿児童青年精神保健懇話会 代表世話人、京都児童精神医学研究会 世話人、国際医学総合雑誌 Medical Science Monitor 査読委員他

- ・社会的役職 文部科学省・日本学校保健会「心の健康づくり推進委員会」委員長、同「保健室利用状況調査委員会」委員長、文部科学省「情動の科学的解明とその教育への応用等に関する検討会」委員、裁判所委員（京都家庭裁判所）他

（講演抄録）近年、急速に注目を集めている広汎性発達障害（Pervasive Developmental Disorder, PDD）は、20世紀に精神医療の中心であった統合失調症や気分障害をはじめとする精神病圏、心因性との関連が疑われてきた神経症圏、あるいは20世紀後半に登場した人格障害圏のいずれとも異なるタイプの障害であり、幼少期からその特徴が発現する発達障害のカテゴリーに属している。最近、その罹病率（約1%あるいはそれ以上といわれる）の高さとともに、他の主要精神疾患との鑑別において話題となる機会が増している。

PDDはこれまで知られてきた精神疾患と比べ、以下の点で相違がみられる。まず、多くの疾患にみられる「発症期」というものがなく、3歳くらいまで

に徐々に周囲に気づかれるという経過をとりやすい。次に、診断の中核をなす症候（基本障害）には、「対人相互的反応性」の障害という考え方が含まれているが、それが従来扱われてきた精神科的諸症状、すなわち幻覚や妄想のような精神病症状、抑うつや躁という気分症状、神経心理症状などと異なる概念である。さらに、その症候の具体的臨床像が年齢発達とともに大きく変遷してゆく点も、精神科医による障害の把握を困難にしている（精神科医以外による診断についてはなおさらである）。PDDの第2の特徴である興味や行動の限局化や反復傾向は、強迫行為や強迫観念と類似する部分が少なくなく、それらが前景に出る場合には強迫性障害の疑いとして精神医療が求められることがある。

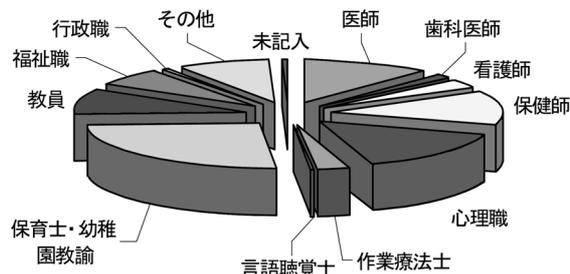
PDD、とくに成人期のケースでは、新たな精神症状を合併していることが多い。その代表は、不適応を背景とした被害関係念慮であり、幻聴（まれに幻視）のような幻覚を合併することもある。その場合、統合失調症との鑑別が必要となり、最近の一般精神科外来診療でもトピックとなっている。それ以外では、気分障害、乖離症状、強迫性障害などの合併もみられる。これらとは別に、児童期から、てんかん、チック障害、学習障害などを合併しているケースも少なくない。

合併症の問題を別にすると、PDDの基本障害は、程度は変化しつつも原則的には生涯持続し、「発症」というよりも生得的資質という捉え方をする方が現実に近い。症状が変動し、薬物などの治療により病態が大きく変化する精神疾患にともなう考え方が適用しづらい問題が現れる。司法化した場合の事理弁識能力や行為制御能力についての議論はその一例といえる。一方、広汎性発達障害であるとわかることにより、それまで曖昧なまま背理的に人格障害圏の診断が（不適切に）適用されていた臨床像が、明瞭で一貫した視点から理解されるケースも現れている。以上のように、PDDの登場は、発達を含めたより包括的な視点を精神医療と精神医学に求めるとともに、精神科診断のより明確な範疇化を前進させる点で非常に大きな意義をもつと考えられる。

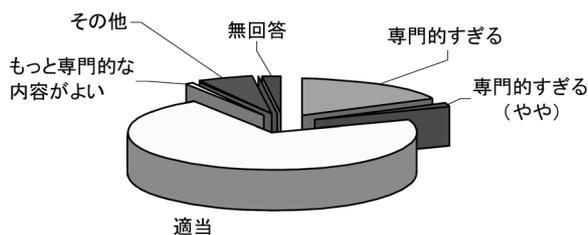
参加者人数 514名：医師 65名、保健医療関係者 112名、保育士 133名、教員 68名、その他 136名

(アンケートより：回収 229名)

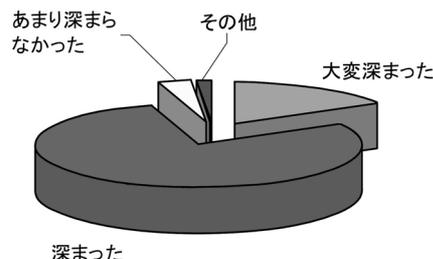
【Q1】回答者の職種



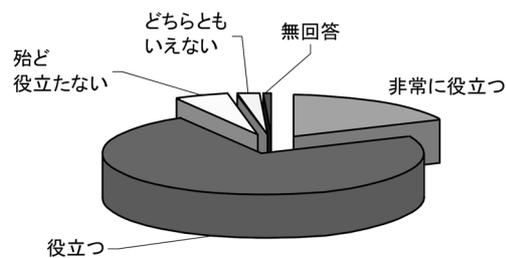
【Q2】研修内容について



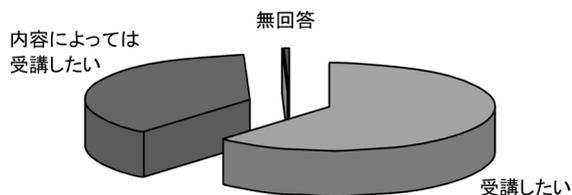
【Q3】発達障害に対する理解



【Q4】研修の役立ち度



【Q5】今後の受講希望



【Q6】今後受講してみたい研修について（複数回答可）

1. 発達障害児（者）の保護者のサポート、カウンセリングに関する研修 176名
2. 不適応を減らす支援方法（工夫）に関する研修 158名
3. 診断後の治療・療育に関する専門的な研修

- 146名
4. 発達障害の診断に関する専門的な研修 68名
5. 発達障害を理解するための入門的な研修 67名
6. 発達障害の評価尺度に関する研修 54名
7. その他

【Q7】その他感想など（医療関係者を中心に抜粋）

- ・より実践的にどう指導・サポートするかの療育の面の情報が不足している（医師）
- ・PDDに限らず保育士さんから“何かおかしい”と相談され、福祉係へ連絡しても多忙の為なかなか保育園に来てもらえない。保護者に伝えても、大したことないとか忙しいと専門医受診されなかったのが、正常範囲なのか障害があるのかははっきりしないことも多い。（医師）
- ・地域によっては専門医が非常に少ない地区がある。そのため診断する先生の診断が本当かどうかセカンドオピニオンがないので不安。診断を受けに行くにも時間がかかり、家族が協力的でないと診断さえつかないことがある。これらに答えられるよう努力したいので、勉強する機会を何度もして欲しい。（医師）
- ・お二人とも非常に造詣の深い方で、一部お話についていけないところもありましたが、興味深く聴かせていただきました。現在患者も一人扱っていますが保護者への対応、指導の心構え、方法の具体例など聞いてみたいと思います。（歯科医師）
- ・後半は内容に対して時間が短かった。1日分くらいの内容ではなかったか。（歯科医師）
- ・他職種の中で、行政スタッフとしてとても参考になることが多くありました。ありがとうございました。条例やデータも見る事が出来、良かったです。また参加させていただきたいです。（歯科衛生士）
- ・普段の業務に大変役立つ内容で、うれしかったです。初めての子供のときには、なかなか気付かないことも多いと言われていました。私の検診のカルテは、アンケートがあるにせよ、確かにデータベースとしては使えないものかもしれないと、記録の大切さと、継続的にかかわりが必要なことは分っていながら今に至っています。個人情報保護の中、どこまで継続的にかかわりが取れるか分かりませんが、保健師として長期的

わり、サポートが出来るよう、努力したいと思っています。（保健師）

- ・こういった全体的な発達障害における話が聞けてよかったですと思います。もうすこしゆったりと話が聞けるともっと良かったのですが……。今後、療育に向けた、かかわり方のポイントや保護者へのサポートに関して研修があるとうれしいです。実際Dr地域での関わりで必要な事など共通認識になれると良いと思うのですが。（保健師）
- ・診断後のフォロー体制ができていない。どこへどのようにつないでいくかが市としての課題か。（保健師）
- ・発達障害の療育支援に日常的に困っています。本日の医療、保健、福祉関係者のこのような研修、検討会に関する催しを希望します。（保健師）
- ・療育相談の場が必要。必ずしも診断が必要ではなく、周囲の対応が大切だということがよくわかるが、それを気軽に相談できる場がないか、予約が多く、なかなか受診も出来ない。（保健師）
- ・さまざまな方向からのお話、ありがとうございました。とても刺激的で知識を広めるためのとてもよい機会になったと思います。少しでも子供たちの生活が過ごしやすくなるように自分自身の引き出しを増やしていけたらと思います。（作業療法士）
- ・理解、解明が進みつつある分野で、知見も変わっていくでしょうから、今後も継続的に実施して欲しい。診断後のサポート体制が現場では急務の課題だと思います。（心理職）
- ・分りやすい話で、今後の理解や支援に役立つと思います。診断の場としては増えていっても、現在の福祉施策の中では、療育という部分が、かなり切り捨てられていると感じています。県としても、早期からの療育システムをきちんと確立していただけるよう希望します。（心理職）
- ・医師のみに限らず、療育スタッフに門戸を開いてくださった研修会、とても有意義でした。ありがとうございました。（保育士・幼稚園教諭）
- ・分りやすい最新の情報を提供頂きありがとうございました。……。もっとこのような機会があり、他職種につながる機会があると良いと思

ます。(教員)

- ・医師でないものについてはついていくのがやっとなでしたが、日ごろ気付けない所に目を向けることができました。両先生のお人柄に感激しました。ありがとうございました。(教員)
- ・早期発見と診断の有用性や医学的な理解について専門家の立場からのお話をたっぷり拝聴でき、ありがたく思いました。(行政職)
- ・その他

(3) 平成 18 年 10 月 1 日(日) 10:00~12:30

対象：医師のみ

講演テーマ：発達障害の診断(1)～学童期・思春期を中心に

講師：広島市こども療育センター 大澤 多美子
(講師略歴)

広島市生まれ

広島女学院中学・高校卒

昭和55年3月 神戸大学医学部卒業

昭和55年4月～広島大学医学部附属病院精神神経科 入局

昭和56年6月～国立療養所賀茂病院精神科

昭和59年1月～現在 広島市こども療育センター
発達支援部長

平成17年10月1日～広島市発達障害者支援センター
センター長(兼務)

- ・専門：児童思春期精神医学，発達障害医学
児童精神科認定医，精神科専門医
- ・所属学会：日本児童青年精神医学会，日本精神神経学会

(講演抄録)

I. 内容：

自閉症スペクトラムを中心に，レベル1(スクリーニングレベル)：概観，レベル2(典型例)：DSM-IV-TRを参考に，レベル3：ADOSのモジュール3の観察ポイントを参考に，診断する際の所見の取り方について，自閉症スペクトラムの子ども達のビデオを用いて説明した。最後に，支援の実際(視覚的支援，構造化など)を，写真や絵，ビデオなどを見せて講義をした。

II. レベル1(スクリーニングレベル)：概観について

幼児から小中学生，成人の自閉症スペクトラムの人たちのビデオを観てもらい他の障害との質的な違いの特徴をまずは大まかに紹介した。診断する際の注意点として，

- (1) 精神遅滞があってもなくても，自閉症(遅れではなく，偏り)を見逃さないこと，
- (2) 幼児期の多動は，注意欠陥多動性障害と誤診しないようにする
- (3) 学習障害で，文部科学省の定義を使用する場合は，アスペルガー障害の合併の可能性を考慮しなければならない

III. レベル2(典型例)について

DSM-IV-TRの診断基準を参考に，自閉症の症例(1歳6ヶ月，中3，高2)をビデオで見て貰い，所見の取り方を示した。所見にはインフォーマルな所見とフォーマルな所見がある。待合室での子どもの様子や，名前を呼んで診察室に入る前でも，名前に反応するか，視線はどこか，何に興味を示すか，遊びを止められるか，発声や言葉，服装，歩き方など多くの所見が取れることを示した。ソーシャルコミュニケーションの領域である顔の表情，プロソディ(音程，音量，音質など)，プラグマチクスと心の理論について，誕生から思春期までの発達について説明し，不適切な問題行動の存在だけでなく，適切な行動の欠如が問題であることを示した。

IV. レベル3(ADOSを参考)について

ADOSには4つのモジュールがあるが，特に言葉を流暢に話す子ども/青少年を対象とする，モジュール3を中心に観察ポイントを示した。ADOSは自閉症スペクトラム診断に重要な，対人関係，コミュニケーション及び言語に焦点を当てる検査法で，最小限の構造化又は指示の状況で，どのくらいうまく対人的なやりとりを開始し，維持できるかを評価する。14の活動内容があり，それぞれの項目および観察のポイントを示しながら，この研修会のために協力してくれた自閉症の子ども(小中高校生)たちのビデオを通して学習した。

V. 支援の実際について

医療場面や学校検診など，医師がかかわる場での支援の実際例を，写真や図や絵などで示した。支援の実際については，広島県地域保健対策協議会・発達障害者支援特別委員会の発行したリーフレット，「医師，患者に，会う」を配布して参考にして貰った。

この専門医師養成研修会のためにモデルになってくれた自閉症スペクトラムの子ども達や保護者の協力に感謝している。

(4) 平成 18 年 10 月 1 日(日) 14:00~15:30

対象：医師のみ

講演テーマ：発達障害の診断 (2)

～乳幼児期を中心に～

講師：広島市こども療育センター 河村理英子

(講師略歴)

昭和60年3月 昭和大学医学部卒業

同年4月 昭和大学附属病院小児科入局

昭和61年4月～昭和63年4月までの2年間

昭和大学附属豊洲病院小児科，
亀田総合病院小児科，横浜日赤病院
小児科で研修

平成2年4月 広島大学小児科入局

平成2年6月 国立療養所原病院重症心身障害児
病棟担当，小児発達外来担当

平成12年4月 広島市こども療育センター小児科
技監

平成14年4月 肢体不自由児通園施設二葉園園長
及び囁託医を併任

・所属学会 日本小児科学会，日本小児神経学会，
日本重症心身障害学会

・小児科専門医

(講演抄録) 発達障害者支援法で対象にしている，
広汎性発達障害，注意欠陥多動性障害について，乳
幼児期早期の診断及び支援について研修を行った。

まず，広汎性発達障害と診断された児に早期に見
られる症状をその障害の三つ組み（対人的相互反応
の質的障害，コミュニケーションの質的障害，行動，
興味，活動の限定された反復的で常同的な様式）に
整理し年齢の変化に沿っても説明した。また，具体
的事例を提示し，その症状をビデオで紹介した。
PARS（広汎性発達障害 日本自閉症協会評定尺度），
M-CHAT（The Modified Checklist for Autism in Tod-
dlers）などのスクリーニングチェックリスト，CARS
（小児自閉症評定尺度）などの診断バッテリーを紹介
した。

また，広汎性発達障害と診断された症例への支援
の基本を説明し，広島市こども療育センターで行っ
ている療育教室での具体的取り組みをビデオで紹介
した。

乳幼児期の支援は運動発達に問題のある児童を対
象とした療育教室の取り組み，幼児期後半は高機能
自閉症児のための構造化を取り入れた教室の取り組
みをビデオで紹介し視覚支援，物理的構造化などの

重要性を説明した。

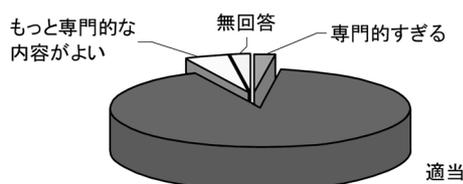
後半は注意欠陥多動性障害の診断のための基本的
作業，薬物治療，メチルフェニデートの投与の基
本について説明を行い，作業療法の治療場面での支
援をビデオで紹介した。

(コメント) 松田病院 松田文雄

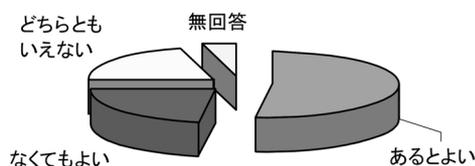
発達障害の理解と診断について，お二人の先生方
からとても丁寧に分かりやすくお話をしていただい
たように思います。ありがとうございました。一言
コメントをさせていただきます。子どもの臨床場面
では，養育者に対し「まず，助言者である前に良き
理解者であれ」とお伝えすることが多く，このこと
は子どもの臨床家についても同じ事が言えるのでは
ないかと思っています。そして，理解と診断は「そ
の子」にとって，「その子」に対する今後の対応や将
来のために役に立つものであることが望ましいと言
えるのではないのでしょうか。以前，「全体の理解」
と「個の理解」の両方が必要であると述べさせてい
ただいたように思います。今後は，理解の上に立ち，
目前の目標と将来の目標を同じ線で結び，成長を育
むための方策を本日お集まりの先生方と一緒に考え
ていきたいと思っています。

参加人数：対象は医師のみで，62名参加
(アンケートより：回収44名)

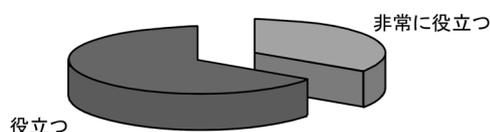
【Q1】研修内容



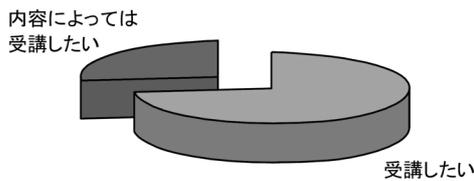
【Q2】実習の必要性



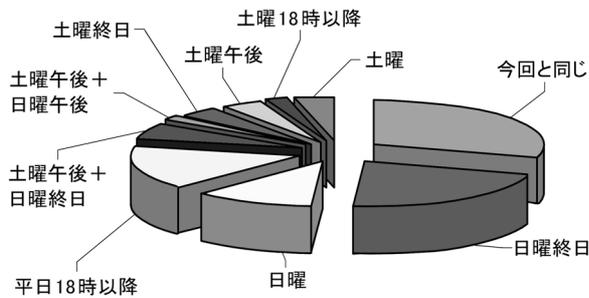
【Q3】研修の役立ち度



【Q4】ステップアップ研修受講希望

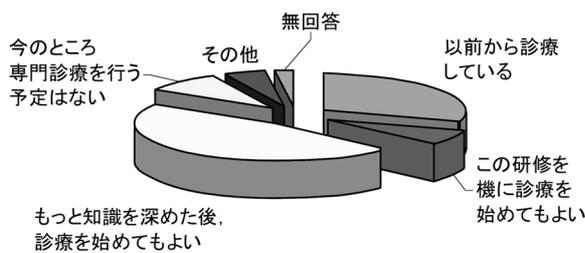


【Q5】ステップアップ研修日程希望



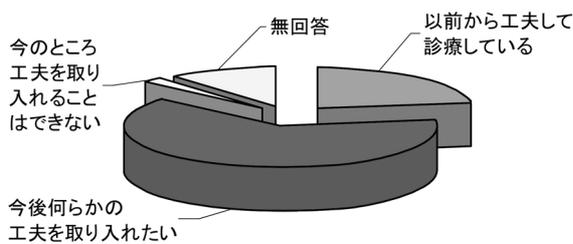
【Q6】今後の方針

(1) 専門診療について



【Q6】今後の方針

(2) 工夫した身体疾患の診療について



B. 学童期から成人期の発達障害専門医師養成研修

(1) 平成 18 年 12 月 2 日(土) 10:00~12:30

対象：講演テーマ：発達障害の診断と対応—落ち着きのない子を中心に—

講師：社団法人発達協会王子クリニック 石崎朝世先生

(講師略歴)

1975年 東京医科歯科大学医学部卒業。小児科入局。

1979年 小児神経学を学ぶため、東京女子医大小児科に入局。その後発達障害児者の臨床に取り組むようになる。

1983年 重症心身障害児者の施設である都立府中療育センターに勤務。同時に保健所などで、発達障害を持つ子ども、発達障害が心配な子どもの発達援助にかかわるようになった。

1992年 4 月 社団法人発達協会王子クリニックの院長となり今日に至る。

以来主に精神発達障害の子どもたちを医療の面で応援したい、療育への架け橋になりたいと願い、子どもたち青年たちの診療をしている。

(講演抄録) 精神面、運動面の発達に問題があって、日常生活に支障があり、社会適応に向け支援が必要な場合、「発達障害」があるというが、ここでは、落ち着きのない子の鑑別という視点で、精神発達障害(認知面、情緒面、行動面に発達の問題がある場合)をとりあげ、その医学的な理解と支援の実際、しばしば行われる薬物治療についてお伝えする。

子どもの落ち着きのなさの要因として、①問題にならない程度のもの。②注意欠陥多動性障害(ADHD)。③広汎性発達障害。④知的障害(精神遅滞)。⑤環境要因・心理的な要因。⑥てんかん、精神疾患の発症、稀に脳や内分泌の病気など身体疾患の場合もある。⑤は、①から④の増強因子となる。②から⑤の重複も多い。⑥の重複もある。

それぞれの要因の鑑別のポイントと診察する際の年代別の問診のポイントや診かたの実際をお伝えしたい。発達障害の診断には経過を知ることが大切である。

次に、発達障害別の援助の要点、年齢別の対応の要点をお伝えする。さまざまな発達障害や障害の程度があるにしても、年齢に応じたかかわり方や援助がある。

薬物治療は、発達障害の症状あるいは様々な要因からくる落ち着きのなさが、日常生活に著しく支障をきたすほどであるとき行う場合があるが、それは、適切な対応があつてこそ、子どもの発達に有用なものとなる。

(2) 平成 18 年 12 月 2 日(土) 13:30~16:00

講演：高機能自閉症スペクトラムの診断と治療

講師：京都市児童福祉センター、京都市発達障害者支援センター 門真一郎先生

(講師略歴)

1948年 広島市の生まれ

1973年 京都大学医学部卒業

1980-81年 ロンドン大学精神医学研究所にて研修

1981年より京都市児童福祉センターに勤務

現在、京都市児童福祉センター副院長

京都市発達障害者支援センター長（兼務）、
京都大学医学部臨床教授

著書：「不登校を解く」（ミネルヴァ書房）、青年期・成人期自閉症（自閉症協会京都府支部刊）他

訳書：キャロル・グレイ著「コミック会話」（明石書店）

ピーター・サットマリ「虹の架け橋-自閉症・アスペルガー症候群の心の世界を理解するために-」（星和書店）

ボンディ&フロスト「絵カード交換式コミュニケーション・システム（ペクス）マニュアル」（NPO 法人それいゆ）

ウェルトン「ねえ、ぼくのアスペルガー症候群の話、聞いてくれる？」（明石書店）

サブナー&マイルズ「家庭と地域のできる自閉症とアスペルガー症候群の子どもへの視覚的支援」（明石書店）

ホームページ

[http://www.eonet.ne.jp/~skado /index.htm](http://www.eonet.ne.jp/~skado/index.htm)

（講演抄録）スペクトラムとは連続体である。国際的な診断基準の整備や以前より広く自閉症をとるようになったことにより有病率が増えていると考えられる。診断に必要な情報は、乳幼児期からのヒストリー（発達歴・病歴）、現在の行動特徴。診断ツール例として、ADI-R、DISCO、CARS、ADOSがあるが、完全なものはまだない。1人の子が持つ発達障害はひとつとは限らず、自閉症スペクトラム、注意欠陥／多動性障害（AD／HD）、学習障害（LD）の3つとも持っている場合もあるが、一つしか診断名がつかないなど、着眼点の違いによる診断の混乱も見られる。

PDDとLD、AD／HDについて世界保健機関（WHO）：国際疾病分類ICD-10と米国精神医学会：診断統計マニュアルDSM-IV-TRの考え方を紹介するが、両方の特徴を持つ子には両方診断名をつけるべきである。

アスペルガー症候群の人は①対人関係（社会性）、②コミュニケーション、③想像力・こだわりの特徴が見られる。「高機能」とは「知的障害がない」こ

とであって、自閉症スペクトラムの特徴は知的障害にかかわらず持っている。自閉症スペクトラムの心理メカニズムと主特徴として、①心の理論、②求心的統合、③実行機能、④順次処理、⑤感覚などに不調がありそれが一長一短様々な行動を生じさせている。

自閉症スペクトラムの人は、目に見えないことへの理解・想像・推測、全体状況の把握、時間的見通しを立てた計画的行動や自己点検、音声言語の意味理解が不得意である。視覚優位性が検査結果に出ない場合でも、目に見えないことを見えるようにする視覚的支援は有効。視覚的構造化のツールとしてコミック会話とソーシャルストーリー、ソーシャルストーリーの目的、題材、効果、6つの文型、10項目決定基準について、事例を交えながら紹介する。対象：発達障害児者に関わっている専門職（医師に限らない）

（参加者人数）357名（医師62名、保健医療関係者53名、保育士47名、教員57名、その他76名）

（アンケートより：回収134名）

【Q1】回答者の職種

医師21名、作業療法士29名、教員20名、保育士・幼稚園教諭18名、その他

【Q2】研修内容はいかがでしたか

適当117名、もっと専門的な内容がいい8名、その他

【Q3】発達障害に対する理解は深まりましたか

深まった92名、大変深まった35名、その他

【Q4】研修内容は業務や職場で役立つものでしたか

役立つ92名、非常に役立つ39名、その他

【Q5】今後発達障害に関する研修会があれば受講されますか

受講したい95名、内容によっては受講したい36名、その他

【Q6】今後受講してみたい研修について（複数回答可）

- ・発達障害児（者）の保護者のサポート、カウンセリングに関する研修 97名
- ・不適応を減らす支援方法（工夫）に関する研修 97名
- ・診断と治療・療育に関する専門的な研修 83名
- ・発達障害の評価尺度に関する研修 38名
- ・発達障害の診断に関する専門的な研修 37名

- ・発達障害を理解するための入門的な研修 24名
- ・その他

【Q7】その他感想など

(3) 平成 18 年 12 月 3 日(日) 10:00~12:00

対象：医師のみ（参加者人数 59 名）

講演テーマ：青年期～成人期の高機能広汎性発達障害の診断と治療

—重ね着症候群を中心に—

講師：広島市精神保健福祉センター デイ・ケア課長 谷山純子

(講師略歴)

昭和59年 広島大学医学部卒業，同大精神科に入局

その後広大，広島静養院などで研修

昭和61年～静岡県の第三駿府病院に勤務

平成 4 年～広島静養院に勤務

平成 9 年～現職

(平成 10 年～一年間米国に居住し同国の精神医療を見学)

- ・所属学会：日本精神神経学会，日本児童青年精神医学会，日本精神分析学会，日本心身医学会，日本集団療法学会，日本デイケア学会

・資格：精神保健指定医，日本医師会認定産業医（講演抄録）近年，広島市精神保健福祉センターを受診する患者群の中に，背景に軽度の発達障害を有するものが多く存在していることが明らかになってきている。彼らは，対人恐怖症，強迫症状，抑うつ症状，幻覚妄想，摂食障害，各種パーソナリティ障害など多彩な臨床症状を呈している。また，知的障害がないために就学時代は発達障害があるとは見なされていない。衣笠は，これらの患者群を「重ね着症候群」(layered-clothes syndrome)と命名し，その特徴を明らかにしようとしてきた。

重ね着症候群の定義は，以下に要約される。①初診時 18 才以上（広義には 16 才以上）で，その時初めて背景の発達障害が発見されたもの。②知的障害が認められない（IQ ≥ 85）。③種々の精神症状や行動障害を主訴に受診し，臨床診断も多彩で，殆どの精神疾患を網羅している。④これらの多彩な臨床症状の背景に，高機能広汎性発達障害が潜伏している。⑤高知能のため課題達成能力が高く，就学時代は発達障害と見なされていない。⑥一部に，児童期，思春期に不登校や神経症の既往があるが，発達障害

を疑われたことはない。

重ね着症候群の背景にある発達障害は，非常に軽度のものが多く，DSM-IV では特定不能の広汎性発達障害に該当する。学童期には教師や両親も障害とは考えなかった程度に軽症のものである。

その診断には，通常の精神科一般診断や，分析的精神療法の適応を判断するための力動的診断面接に加え，発達診断の基準項目の確認が必要になる。特に，乳幼児期の発達の問題に関しては，母親からの情報が重要である。上記に加え，診察場面での特徴や，心理テスト（WAIS-R，MMPI，ロールシャッハテスト，AQ-J など）の結果を総合的に判定することが必要になる。

また，治療は，臨床症状に対する薬物療法を中心にし，認知障害に対しては支持的，療育的アプローチが基本になる。さらにデイケアが有効な場合も多い。

当センターのデイケアにおいても，重ね着症候群の患者が年々増加してきている。彼らの経年変化を LASMI（精神障害者社会生活評価尺度）を用いて検討した結果，日常生活領域，課題の遂行領域に比し，対人関係領域の多くの項目において有意に改善が見られている。

(4) 平成 18 年 12 月 3 日(日) 13:00~15:00

対象：医師のみ（参加者人数 59 名）

講演テーマ：青年期～成人期の広汎性発達障害の診断と治療—行動障害を伴う場合—

講師：広島県心身障害者コロニーわかば療育園 所長 岩崎 學

(講師略歴) 1947 年生まれ 鳥根県出身

昭和56年 3 月 広島大学医学部卒業

昭和56年 5 月 医師免許取得 広島大学医学部神経精神医学教室に入る
(専攻 児童精神医学)

昭和56年12月 広島県立広島病院 精神神経科
(臨床研修医)

昭和58年 4 月 国立療養所原病院 精神科
国立大竹病院心身症科 併任

昭和60年 4 月 国立療養所原病院 精神科医長

平成 9 年10月 国立療養所賀茂病院 神経内科医長

平成13年 3 月まで，国立療養所原病院 非常勤医師兼任

平成13年 4 月 国立療養所賀茂病院 副院長

平成16年4月 広島県立心身障害者コロニー
 (現・県立障害者療育支援センター
 わかば療育園) 所長(園長) 現
 在に至る

公務以外では、日本てんかん協会広島県支部代
 表、広島県重症児(者)を守る会 顧問 などを
 つとめる
 (講演抄録)

1. 青年期になって、発達障害外来を訪れる場合と
 しては、
 - ① 幼児期に発達障害と診断されていないアスペ
 ルガー症候群などの場合
 - ② 児童の療育機関がパンク状態となって、安定
 しているからと治療中止を言われたが、引き続
 き療育相談などを求められる場合
 - ③ 思春期以降になって、行動障害が出現したり、
 激しくなった場合
 - ④ 就労、年金取得のためなどに、精神保健福祉
 手帳や診断書が要る場合
 などがある。
2. 物心ついた年齢の、しかも知的には高いケース
 で診断名を告知することには慎重でなければい
 けない。吉田友子先生の「発達障害研究」の論
 文にあるように、心理教育的アプローチとしての
 告知であることが、告知に伴う「心的外傷」
 を防ぐためにも重要である。
3. 知的障害が中度から重度の場合などで、激しい
 行動障害が生じることを防ぐことは、社会参加
 や自由な生活環境で暮らすために、極めて重要
 なことである。そのためには、視覚的支援など
 で、コミュニケーションの能力を養うこと、作
 業や余暇の過ごし方の指導、こだわり行動を激
 化させないためには、不安を防ぐためのスケ
 ジュールの理解などが必要だが、それ以上に、
 パニックなどを生じた際の養育者の忍耐強い
 ジェントル・ケアが必須不可欠である。教育機
 関との連携も欠かせない。
4. 行動障害が深刻化しないためには、適切な薬物
 療法が奏功することもある。時宜を失せず、少
 量の抗精神病薬などを用いることで、激しいパ
 ニックが静穏化し、施設入所・入院などを防げ
 たことは枚挙にいとまがない。ただし、漫然と
 薬物を使用し続けることには、副作用などの問
 題があるため、医師とのコミュニケーションを

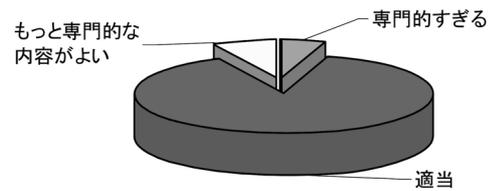
とりながら、減量、中止を図る必要がある。

5. 実際の診療例として、合計7人の事例を紹介し
 た。いじめにあつて、強迫行動が激化した例、
 パニックが激しくて薬物療法を行ったが、環境
 改善で薬物を中止し得た例、音過敏が激しくて
 パニックが頻発する例、前医でアスペルガー症
 候群と不用意に病名だけ告げられて当惑に陥っ
 た例、アスペルガー症候群に統合失調症が合併
 した例、同じくアスペルガー症候群にうつ状態
 が合併した例などである。

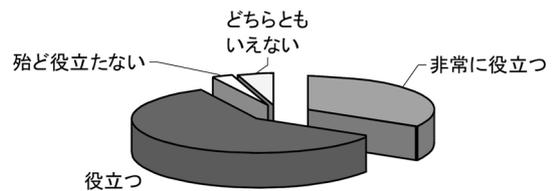
(コメント) 広島市こども療育センター 大澤多美子
 青年期～成人期の広汎性発達障害の人たち(重度
 の知的障害を伴う人たちから高機能の人たち)の問
 題行動や多彩な精神症状について、お二人の先生か
 ら具体的で分かりやすいお話をしていただき、ありが
 とうございました。やはり大切なことは、早期に正
 しい診断をすることであり、その特性にあった療育
 や教育の大切さである。一般の人たちへの啓発は勿
 論、早期発見に関わる保健師、早期診断を担当する
 医師、その後の早期療育や教育、就労など人生全般
 にかかわる専門職の責任は大きいと思われる。それ
 ぞれの専門職が発達障害についてますます研鑽し、
 連携しあい、すべての発達障害を持つ人たちが人生
 の質を高め、その人たちがらしく生きていけるよう
 な社会にしていけたらと思う。

(アンケートより：参加人数(医師のみ)
 59名中43名回収)

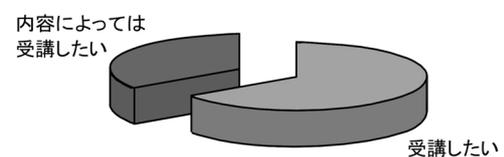
[Q1] 研修内容



[Q2] 実習の必要性



[Q3] ステップアップ研修受講希望

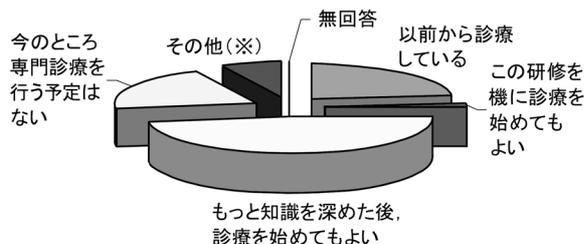


【Q4】ステップアップ研修で学んでみたい内容についてお書きください

アスペルガー障害／高機能自閉症の診断と評価、薬物療法、具体的な支援の方法や工夫、問題行動への対応、保護者への指導の仕方など

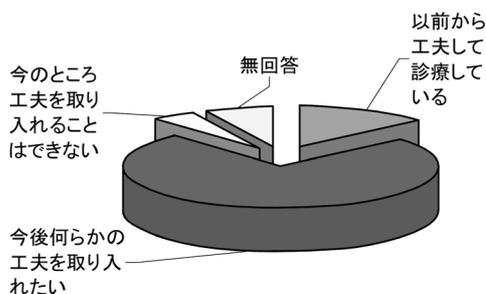
【Q5】今後の方針

(1) 専門診療について



【Q5】今後の方針

(2) 工夫した身体疾患の診療について



【Q6】その他感想など

たくさん先生方が参加されているのに驚いた。有益な研修会ありがとうございました。広島でもこのような専門的な研修が始まったことがすばらしい等。

2. 医療サポート手帳の作成 (資料2)

発達障害児(者)は、コミュニケーションや言葉の理解などに大きな問題を抱えており、適切な医療が受けられない状況がある。そこで、「医療サポート手帳」を作成し、診察時に留意していただきたいことや主治医からの注意事項などを通じ、発達障害のある一人ひとりの特性を知っていただき、円滑に診療を行っていただくための手帳である。この手帳の配布機関は、広島県発達障害者支援センター、広島市こども療育センター(広島市発達障害者支援セン

ター)、こども家庭センター(広島・福山・備北)、広島市児童相談所、発達障害児(者)の専門診療を行っている医療機関などである。医療機関の皆様へ「医療サポート手帳」にご協力くださいのポスターを配布、また医師会速報で協力をお願いした(資料3)。また本人・保護者用に「医療サポート手帳」が出来ましたというチラシを配布し、記入例などを示した。お互いが理解しあい、医師と患者とのさらにより良い関係が築いていければと思う。詳しくは、広島県地域保健対策協議会のホームページ <http://www.citaikyoo.jp/> を参照していただきたい。

Ⅲ. ま と め

今年度に予定した事業はすべて実践した。まず研修については、土曜日は発達障害児者に関わる専門職(医師に限らない)を対象に行い、多くの参加があり、共通理解を深めることが出来た。アンケート結果からもおおむね満足できる内容であったと思う。日曜日は、医師のみを対象とし、さらに専門の研修会にしたが、想像を超える参加者数があったことに驚くとともに、頼もしさを覚えた。アンケート結果からもほぼ満足のいく研修会であったと思う。さらに研修を受けて、専門診療をおこなってもいいと思われる医師が多く見られたことは喜ばしい。今年度は専門医師養成研修会の予算は広島県からこの委員会に委託されて実施出来た。多くの医師が発達障害についての更なるステップアップ研修を希望されており、今後も継続研修希望の期待に答えていただければと思う。しかし医師全体のレベルアップも大切だが、専門医師養成のためにはさらに努力が必要であると思われる。少なくとも圏域別または地区の基幹病院に、発達障害に詳しい専門医師が確保出来るように、さらに焦点的・重点的な医師専門医師養成研修が必要であり、今後の課題である。また、今年度の活動として、医療サポート手帳を作成し、発達障害を持つ人や保護者、関係者で希望される人たちに配布した。この手帳を多くの人が活用されることを期待している。この2年間の活動を通して、発達障害への理解が進み、医師と患者との関係がさらに良いものになる事を願っている。

【資料1】

発達障害専門医師養成研修会

広汎性発達障害（自閉症，アスペルガー症候群等），ADHD等の診断に関する講義（1日目）と，より実践的内容のセミナー（2日目）で構成する研修会を開催します。

対象者 **医師**（ただし，研修A，Bともに**1日目に限り，医師以外の保健医療関係者，保育士，教員等専門職も御参加いただけます。**）

受講料 **入場無料**（※公共交通機関をご利用のうえご来場ください。）

主催 広島県（問合先：障害者支援室 TEL：082-513-3156（ダイヤルイン）担当 鶴野）

日程等

【A：乳幼児期から学童期の発達障害専門医師養成研修】（定員：1日目500名，2日目30名）

形式	日時・場所	内容・講師
1日目 講義	平成18年9月30日(土) 9:55～16:00 中国新聞ホール 広島市中区土橋7-1	司会：広大大学院医歯薬学総合研究科小児科学研究室 教授 小林 正 夫 10:00-12:30「広汎性発達障害の早期発見と早期診断について」 国立精神・神経センター精神保健研究所 児童・思春期精神保健部長 神尾 陽 子 13:30-16:00「高機能広汎性発達障害の医学的理解」 京都大学医学部保健学科 教授 十一元 三
2日目 セミナー	平成18年10月1日(日) 10:00～16:00 県立生涯学習センター 第3研修室 広島市東区光町2-1-14	司会：県立広島大学保健福祉学部教授 土田 玲 子 10:00-12:30「発達障害の診断(1)～学童期・思春期を中心に～」 広島市こども療育センター 発達支援部長 大澤多美子 12:30-13:00 質問とまとめ 松田病院 院長 松田 文 雄 14:00-15:30「発達障害の診断(2)～乳幼児期を中心に～」 広島市こども療育センター 小児科医 河村理英子 15:30-16:00 質問とまとめ 松田病院 院長 松田 文 雄

【B：学童期から成人期の発達障害専門医師養成研修】（定員：1日目400名，2日目30名）

形式	日時・場所	内容・講師
1日目 講義	平成18年12月2日(土) 9:55～16:00 広島医師会館2階大講堂 広島市西区観音本町1-1-1	司会：広島市こども療育センター 発達支援部長 大澤多美子 10:00-12:30「発達障害の診断と治療～落ち着きのない子を中心に～」 (社)発達協会 王子クリニック 院長 石崎 朝 世 13:30-16:00「高機能広汎性発達障害の診断と治療」 京都市児童福祉センター 副院長 門 眞一郎
2日目 セミナー	平成18年12月3日(日) 10:00～16:00 広島医師会館 3階 健康教育室 広島市西区観音本町1-1-1	司会：広島県広島こども家庭センター 医監 安 常 香 10:00-12:00「青年期～成人期の高機能広汎性発達障害の診断と治療 —重ね着症候群を中心に—」 広島市精神保健福祉センター デイ・ケア課長 谷山 純 子 13:00-15:00「青年期～成人期の広汎性発達障害の診断と治療—行動 障害を伴う場合—」 広島県心身障害者コロニーわかば療育園 所長 岩 崎 學 15:15-16:00 質問とまとめ 広島市こども療育センター 発達支援部長 大澤多美子

F A X 082-293-3363

発達障害専門医師養成研修受講申込票

広島県医師会地域医療課宛

受講希望 ()内に○印 を記入	研修A	①9月30日	受講希望() 弁当要()	②10月1日 ※医師限定	受講希望() 弁当要()	申込期限 9月20日
	研修B	①12月2日	受講希望() 弁当要()	②12月3日 ※医師限定	受講希望() 弁当要()	申込期限 11月22日
職種 該当に○印	医 師 ・ 保 健 医 療 関 係 者 ・ 保 育 士 ・ 教 員 ・ そ の 他 ()					
氏名	所属機関名 ・ 連絡先		TEL () -			

※ 原則2日連続の研修ですが，1日目のみ，2日目のみの受講も可能です。(2日目は医師のみ)

※ お弁当(お茶付・税込600円)をご希望の方は「弁当要」に○をしてください。

【資料2】

医療サポート手帳

医療とのよりよい
コミュニケーションのために



広島県地域保健対策協議会

～ 医療機関の皆様へ～

「医療サポート手帳」にご協力ください

発達障害児(者)は、コミュニケーションや言葉の理解などに大きな問題を抱えており、適切な医療が受けられない状況があります。

そこで、広島県地域保健対策協議会・発達障害者支援特別委員会では、診療に関するコミュニケーションツールとして「医療サポート手帳」を作成いたしました。

この手帳は、診察時に病院の先生や看護師の方々に知っておいてもらいたいことや主治医からの注意事項などの情報を、主治医や保護者などが記入し、診察前に医療機関へ提出していただきます。これにより、病院の先生や看護師の方々が発達障害のある人への理解を深められ、その方がより安心して診察を受けられることを目的にしている手帳です。

診察の際のご参考にしていただき、不明な点は本人や付き添いの方に質問していただきたいと思っております。障害のある人びとに対するご理解ならびにご協力をお願いします。

平成19年3月25日 広島県地域保健対策協議会・発達障害者支援特別委員会

<医療サポート手帳抜粋>

<p>コミュニケーションのとり方 <small>あてはまるものを○</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実物を見るとわかる ・絵を見てもわかる ・文字で書くとわかる ・簡単な言葉は理解する ・その他 <p>「はい」「いいえ」は表現できる 痛いところを指させる 前もって手順が示されると理解しやすい 理解しやすい</p>	<p>苦手なこと <small>あてはまるものを○ (苦手なことをされると不安定になることがあります)</small></p> <ul style="list-style-type: none"> ・待つこと ・じっとしていること ・初めてのこと ・診察や処置を説明なしでされること ・その他 <p>音、色、味、匂い (具体的に) 触られること 強いところ 狭いところ 白灰</p>	<p>障害についての主治医</p> <p>病院・医院名 _____</p> <p>主治医氏名 _____</p> <p>電 話 () _____</p> <p>◎主治医からの注意事項 (記入日 年 月 日)</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>◎アレルギー 無 () _____</p> <p>◎服 用 薬 無 () _____</p>	<p>病歴</p> <table border="1"> <tr> <td>年 月</td> <td>病 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>記入者</td> <td>病院名・科名</td> <td>診 療 状 況</td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td>年 月</td> <td>病 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>記入者</td> <td>病院名・科名</td> <td>診 療 状 況</td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td>年 月</td> <td>病 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>記入者</td> <td>病院名・科名</td> <td>診 療 状 況</td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td>年 月</td> <td>病 名</td> <td></td> </tr> <tr> <td>記入者</td> <td>病院名・科名</td> <td>診 療 状 況</td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> </table> <p><small>保険証は必ずお持ちください。</small></p>	年 月	病 名		記入者	病院名・科名	診 療 状 況				年 月	病 名		記入者	病院名・科名	診 療 状 況				年 月	病 名		記入者	病院名・科名	診 療 状 況				年 月	病 名		記入者	病院名・科名	診 療 状 況			
年 月	病 名																																						
記入者	病院名・科名	診 療 状 況																																					
年 月	病 名																																						
記入者	病院名・科名	診 療 状 況																																					
年 月	病 名																																						
記入者	病院名・科名	診 療 状 況																																					
年 月	病 名																																						
記入者	病院名・科名	診 療 状 況																																					

記入例など

- ・コミュニケーションのとり方:「言葉では理解できないので、絵や動作で診療の手順を説明してください」など
- ・苦手なこと:「他人に触られること」「大きい音」「白衣を着ている人」など
- ・お願いしたいこと・絶対してほしくないこと:「白衣は苦手なので脱いでください」など
- ・健康情報:主治医の記入欄
- ・病歴欄:うまく診療できた状況やできなかった状況など

《この手帳を配布している機関》

広島県発達障害者支援センター、広島市こども療育センター(広島市発達障害者支援センター)、こども家庭センター(広島・福山・備北)、広島市児童相談所、発達障害児(者)の専門診療を行っている医療機関など

詳しくは、次の機関にお問い合わせください。

お問合わせ先 広島県福祉保健部障害者支援室 電話 082(513)3156
 広島県地域保健対策協議会のホームページ (<http://www.citaikyoo.jp/>)
 広島県のホームページ (<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/>)

広島県地域保健対策協議会発達障害者支援特別委員会

委員長	大澤多美子	広島市こども療育センター発達支援部
委員	岩崎 學	広島県立心身障害者コロニーわかば療育園
	河村理英子	広島市こども療育センター
	小林 正夫	広大大学院医歯薬学総合研究科小児科学研究室
	佐伯真由美	広島県総合精神保健福祉センター地域支援課担当
	寶田 貫	広大大学院医歯薬学総合研究科展開医科学
	谷山 純子	広島市精神保健福祉センター
	土田 玲子	県立広島大学保健福祉学部
	土井 精二	広島県福祉保健部福祉局 障害者支援室自立支援担当室
	西村 浩二	社会福祉法人つつじ 知的障害者通所更正施設ウイング施設
	新田 修三	広島県福祉保健部福祉総室 知的障害者福祉室
	堀江 正憲	広島県医師会
	松田 文雄	松田病院（広島県精神病院協会）
	安常 香	広島県広島こども家庭センター